

主 題：キリストの偉大さを知る旅の始まり

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章1-2節

テーマ：イエス・キリストがどんなにすぐれた偉大なお方なのかを考える

きょうから新たなシリーズとしてコロサイ人への手紙を1章から順に一緒に学んでいきたいと思いません。新たな一年、コロサイ人への手紙を通して、改めて考えてみたいことは、イエス・キリストがどんなにすぐれた偉大なお方なのかということです。果たして私たちはこの方のすばらしさを今どれほど知っているのでしょうか――。

かつてある讃美歌を作曲したルイザ・ステッドは、そのことをよく知っていた人物でした。ステッドは1850年にイギリスのドーバーで誕生し、幼い頃から宣教師になることを望んでいました。しかし、からだの弱かった彼女は、行く予定になっていた中国へ行くことがかなわず、その後25歳の時に結婚し、娘のリリーを授かります。ある日、一家が海辺でピクニックを楽しんでいると、突然助けを求める声が聞こえてきます。彼らは海の中で溺れている男の子を発見します。ステッドの夫は助けなければと、すぐに海に飛び込みました。けれども、それが悲劇の始まりでした。悲しいことに、夫はステッドと娘の目の前で、もがく男の子と一緒に溺死してしまいます。それに加え、夫を失った彼女はその後ひどい貧しさを味わうこととなります。途方に暮れ、食べる物がなくなりました。神様、一体なぜですかと、そんな葛藤を覚えることさえあったのです。しかし、そんなひどい困難を通して、ステッドは大切なことを学びました。それは人生の良い時も悪い時もいつも神様はそばにいてくださるということでした。たとえどんな状況にあらうと、主に信頼することが何よりもすばらしいことであると心から知ったのです。

そして、彼女はそのことを歌にしました。それが英語で“Tis so sweet to trust in Jesus”、訳せば「イエスを信頼することはなんと絶えない喜びなのだろう」という歌でした。この曲は日本語にも直され、「主と主のことばに」という聖歌（496番）として人々の間で賛美されています。この曲の1番と繰り返しの部分は、このようになっていました。

イエスを信頼することはなんと絶えない喜びなのだろう ただ主のことばを信じ

その約束に身を委ね 「それゆえ主はこう仰せられる」と知ることは

イエス イエス 私はどれほど信頼していることでしょうか

私は何度 主が信頼できるお方であると味わってきたことでしょうか

イエス イエス 尊いイエス どうかますます信頼できるよう 恵みをお与えください

すごいことばだと思いませんか？間違いなくステッドは、大きな失意や苦しみを経験した人物でした。愛する夫を目の前で失うという悲劇に見舞われたのです。しかし、そんな彼女もキリストの偉大さを本当に知ったからこそ、あふれんばかりの喜びを見出すことができました。周りの人や状況ではありません。どんな状況にあらうと変わらないすべてのものにまさり、すべてにおいて十分なイエス・キリストのうちにでした。彼女はそんな主を心から愛していたのです。

このイエス・キリストは何も彼女だけのものではありません。感謝なことに、この方は私たちにとっても同じ主です。私たちも同じように、どんな状況に置かれようと、この偉大な主に信頼することができます。この方のうちに、すべてを見出すことができます。イエス・キリストこそ私たちにとっても十分なお方なのです。でも実際はどうでしょうか？自分自身に問いかけてみましょう、果たしてイエス・キリストはあなたにとって十分な存在でしょうか？今それぞれが置かれている状況は異なるでしょう。ある人はいろいろなことがうまくいっていて、喜びにあふれているかもしれません。ある人はその逆に、

試練や難しさを経験して、悲しみや痛みを味わっているかもしれません。ある人は先が見えない不安定な中で、不安やさまざまな疑問を覚えているかもしれません。では、皆さんが置かれているさまざまな状況の中で、果たしてあなたにとってイエス・キリストは十分でしょうか？置かれた状況の中で、たとえば何かほかの人や物を手にすることができたとしても、ただキリストに信頼し、身を委ねることを選ぶでしょうか？たとえ混乱を覚えることがあったとしても、キリストのことばを信じ、その約束を待ち望むでしょうか？イエス・キリストだけがほかの何よりもすぐれた、自分にとってすべてなのだと、この方にのみ心を留めるでしょうか？それとも別のものに心を奪われたり、目をそらしてしまったりするでしょうか？

正直になれば、私たちは時に主にのみ信頼することにチャレンジや難しさを感じる場合があります。目の前に迫る問題の大きさに隠れて、キリストが見えなくなってしまうことがあったり、生活の中心からキリストが外れてしまうことがあったりします。悲しいことに、私たちはそんな弱さを抱えています。だからこそこのコロサイ人への手紙を学んでいくことはとても大切になります。なぜかという、この手紙の焦点がまさにそこにあるからでした。よく覚えておいてください。パウロの記したこの手紙の中心は、イエス・キリストこそが十分なお方であるということです。この手紙はイエス・キリストだけが十分なお方なのだとことを繰り返し教えています。イエス・キリストこそがすべてのものにまさって偉大なお方であるからこそ、この方はすべてのことにおいて十分な存在なのだと教えているのです。それがこの手紙のテーマでした。この手紙を学んでいけば、私たちは常にそのことを見ることになります。ある聖書注解者もわかりやすく、こんなことばを残していました。「パウロのコロサイ人への手紙は、おそらく新約聖書の中で最もキリストを中心とした書簡です。…この手紙はキリストが最高位のお方であること、キリストの働きが信仰者にとって十分であること、キリストの支配がクリスチャン生活のあらゆる面に適用されることを明確かつ熱心に論じているのです。」と。そんなキリストに焦点を置いた手紙から、改めて私たちの愛する主の偉大さというものを一緒に考えてみましょう。もしまだこの方を全く知らないという方がいるのであれば、ぜひ自分のこととして知ってください。イエス・キリストというお方がどんなお方なのかを知ることは、あなたの人生を変えることに必ずつながります。もうすでにこの主を信じているという方も、そのすばらしさをますます覚えていきましょう。私たちはキリストに似た者へと変わりたいという願いを持っているのです。そのキリストはいったいどんなお方なのか、そのすばらしさに目を留めてみましょう。そして、その主をより知れば知るほど、その主に信頼して歩む者として、ともに変えられていきましょう。

●歴史的背景：コロサイの教会を取り巻いていた状況：

ではまず、これから学ぶ内容をより正しく理解するために、この手紙が記された背景、特にコロサイの教会を取り巻いていた状況について少し思い返してみましょう。コロサイは小アジア、現在のトルコに当たる場所に存在した都市の一つでした。レジメに地図も載せておきましたけれども、近くにはラオデキヤやヒエラポリスといった二つの町があり、コロサイから西に約460キロ進めば、当時のアジア最大の港があって、商業や宗教の中心地として栄えていたエペソの町もありました。そんなコロサイの教会に宛てて、ローマの獄中に捕らえられていたパウロは手紙を書き送ったのです。しかし、コロサイの教会というのは、実を言うと、パウロ自身の働きによって建てられた教会ではありませんでした。パウロはいろいろな教会を建てたのですが、コロサイの教会はそうではなかったのです。もっと言えば、恐らくパウロは、この教会の人々に会ったこともありませんでした。ではだれによって始められたのかと言うと、この町の出身であったエパfrasという人物によってでした。彼はパウロがエペソで働きをしていた約3年の間に会って、彼から福音を聞いて救われたのでしょうか。エペソでのパウロの働きについて、みことばもこんなふうに表示していました。使徒19：1、また9-10節に「1……パウロは奥地を通してエペソに来た。：9……毎日ツラノの講堂で論じた。：10 これが二年の間続いたので、アジアに住む者

はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。」とあります。こうしてアジアに住む多くの人たちがパウロの語ったみことばを耳にしたのです。エパfrasもそのひとりでした。そして救われた彼は、自分の生まれ故郷コロサイの町に戻って福音を宣べ伝え、そして教会を始めることになるのです。

感謝なことに、教会は最初成長していきました。しかし、数年後にはエパfrasの熱心な働きにもかかわらず、コロサイの教会は危機に瀕するようになります。にせ教師たちが登場し、教会の中に間違った教え、異端が広がるようになっていくのです。その異端が具体的にどのようなものだったかについて特定するのは容易ではありません。いろいろな間違った教えが入り込んでいました。詳しいことは、実際の手紙の内容を学んでいく時に触れていければと思いますけれども、少なくとも言えることは、人々の間に入り込んでいた異端には、偶像礼拝や神秘的な知識を教える誤ったギリシヤ哲学、またユダヤ的な伝統主義など、いろいろなものが含まれていたということです。そして、そういったものによって、最初に伝えられたキリストの福音がねじ曲げられていくのです。彼らは、キリストの福音とは異なることを教え、信仰者の間に混乱を引き起こしていました。例えばある人たちは、救われるためにはキリストだけでは不十分だと言うのです。それだけでは全然足りません、あなた方は割礼を受けないといけませんと。かつて行われていた儀式を行って、食べ物や飲み物、祭りや安息日に関するユダヤの律法を守らなければいけない。そうでないと、救いにあずかることはできないと。また、ある人たちはこうも言います。イエス・キリストは、真の神ではありません、いや、彼は真の人でもありませんと。彼にはだれかを救うことなどできません、不十分なのですと。こうしてにせ教師たちは教会を攻撃していました。キリストを否定して正しい福音をねじ曲げようとしていました。まるでイエス・キリストが救いにおいても、人々の信仰生活においても不十分な存在かのように教えていたのです。間違いなく信仰者たちの間には不安が募って、危険が迫っていました。だからこそ、そんな現状を問題視したエパfrasは、はるばる2000キロ以上の道のりを経て、この時パウロが投獄されていたローマへと助けを求めに行くのです。今みたいに飛行機があるわけではありません。歩いたり、船に乗ったりしてエパfrasはパウロに会いに行きました。そしてエパfrasは教会で起こっている問題を彼に告げるのです。彼からの報告を受けたパウロは、その応答として、このコロサイ人への手紙を記しました。

少しだけでも流れはわかったでしょうか？では、ここで考えてみてください。パウロはエパfrasの報告を聞いて手紙を記したのです。どんなことを手紙の中に記したと思います？離れた場所にいる愛する兄弟姉妹たちがキリストに関することで惑わされていることを知ったパウロは、何を一番に伝えようとしたでしょう。キリストは不十分だといった教えが蔓延しているような状況で、彼は何を伝えようとしたのでしょうか？容易に想像できます。彼が伝えたことは非常に明白でした。それはイエス・キリストこそが十分なお方であるということでした。キリストは十分ではないという間違った声に対して、いや、この方こそがすべての者にまさって偉大なお方であると訴えたのです。たとえいろいろな間違った教えが広まっていたとしても、みことばが教えているキリストの姿に目を向けて、この方から日々絶対に離れないようにと、コロサイの人たちを励ましたのです。それがいろいろな問題に直面していたコロサイの兄弟姉妹たちに与えられた最高の解決策でした。最も偉大なキリスト、その方の姿を正しく覚えて、その方に信頼して生きていくこと、それが信仰者の歩みにとって欠かせない鍵でした。

そして、もちろんこれは今の私たちにとっても同じになります。私たちは人それぞれさまざまな問題に直面します。でも、そのどんな時にも鍵になるのは、十分なキリストだということです。キリストのそんな姿を覚えて、私たちは信頼することです。でもそのためには私たちが、キリストがどんなお方なのかということを実際に知らないといけません。ただの知識としてではなくて、私たちはイエス・キリストのすばらしさというものを考えてみる必要があるのです。だからこそ、パウロのことばは、今の私たちにとっても非常に重要なものになります。ですから、今確認したその背景を頭に入れながら、実際に内容を見ていきましょう。

○あいさつのうちに見られる三つの要素 1-2節

きょうは、この手紙の最初のあいさつの部分だけにしぼって見たいと思います。そのあいさつの中に見られる三つの要素を考えてみます。その三つの要素は、手紙の差出人、手紙の宛先、そしてあいさつそのものの内容になります。その三つを1-2節のところから考えてみましょう。

まずいつものようにみことばをお読みしたいと思います。

コロサイ 1：1-2

「:1 神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから、:2 コロサイにいる聖徒たちで、キリストにある忠実な兄弟たちへ。どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように。」

1. 手紙の差出人：パウロ 1節

さて、一つ目の要素である手紙の差出人については、はっきりと1節に記されていました。1節は「神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから」と始まっています。差出人はパウロでした。もう既に何度も触れていることですが、使徒パウロがこの手紙を書き記したのです。でもパウロとはいったいどんな人物だったでしょう？パウロは初めからキリストに忠実に従うような者では全くありませんでした。生粋のユダヤ人として生まれた彼は、律法に自分の身をすべてささげて、周りの人から尊敬されるような人物だったのです。また、彼は余りにも自分の信じるユダヤ教に熱心だったからこそ、自分の信じている神様以外を礼拝する者たちを排除しようとしていました。だからこそ、彼は教会を荒らすだけではなくて、家々に入って男も女も引きずり出して縛り上げ、牢に入れたりしていたのです。彼は主の弟子たちを殺害することに燃えていました。

しかし、そんな彼をほかのだれでもないイエス様が変わられたのです。また新たに教会を迫害しようとダマスコの町へ向かっている途中、主がそのうちに働かれました。その様子が使徒9：3-6に「:3 ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。:4 彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声を聞いた。:5 彼が、「主よ。あなたはどなたですか」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。:6 立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずです。」と記されています。そしてこの後、パウロについて15-16節で「:15 ……「行きなさい。あの人にはわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」と述べられていました。このことばのとおり、キリストに出会ったパウロは完全に変わられました。彼はキリストのすばらしさを知ったのです。それゆえにこれまでの生き方をすべて捨てて、かつて忌み嫌っていたイエス・キリストを人々の前で大胆に宣べ伝える者となりました。

でも彼は、このことを自分の選択でなしたのではありませんでした。彼はただ神のみこころによって救われて、神のみこころによって使徒として召されたのです。そして最後には福音を伝える者として、ひどい苦しみを味わって、そしてそのために命を落とすことになりました。そんなキリスト・イエスの使徒パウロがこのコロサイの手紙を記したのです。ここで少し覚えておいてください。パウロは1節で、自分のことを「使徒パウロ」と言いました。この「使徒」ということばには、「使いの者」とか「使者」、また「権威ある者のからことばを託されて送り出される者」といった意味があります。つまり使徒というのは、自分が自分の意思で語りたいことばを伝える者ではありませんでした。使徒パウロは、自分が言いたいことをしゃべっていたのではなかったのです。使徒パウロは、神様によって派遣された神様からの権威あることばを伝える者でした。パウロはコロサイの人々たちに向かってそのことを一番に言うのです。そして、これはコロサイの人々にとって大きな励ましとなったでしょう。考えてみてください。コロサイの教会の中には、いろいろな誤った教えが出てきていました。彼らは何が正しくて、何が間違

っているのかがわからずに混乱していたのです。イエス・キリストというすべての土台が揺るがされそうになっていました。そんな彼らに、パウロはまず最初に、私はただ神様のあわれみによって、みこころによって使徒とされた者ですとはっきりと言うのです。そしてそんな私は自分のことばではなくて、あなた方が聞かないといけない神様からのことばを教えましょう、ほかのものではなくて、よくこのことばに耳を傾けてくださいと。コロサイの兄弟姉妹たちの目を神様に向けました。それが兄弟姉妹に対して示したパウロの愛でもあったのです。

しかし、同時にパウロはここで自分の名前だけを記していたわけでもありませんでした。1節にはもうひとり、テモテという人物のことも挙げられていました。もちろんここにテモテと書いていますけれども、この手紙をテモテが実際に記したということを目指しているのでは恐らくありません。先ほどから言っているように、著者はパウロでした。しかし、そのパウロにとってこのテモテという人物はとても大切な、愛する存在でした。パウロにとってテモテは、その働きの大きな支えとなる存在でした。だからこそ、パウロは二つの手紙をテモテに宛てて書き記しました。また、彼に対する思いも、こんなふうにも口にすることもありました。ピリピ2：19－22に「:19 しかし、私もあなたがたのことを知って励ましを受けたいので、早くテモテをあなたがたのところに送りたいと、主イエスにあって望んでいます。:20 テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもないからです。:21 だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。:22 しかし、テモテのりっぱな働きぶりは、あなたがたの知っているところです。子が父に仕えるようにして、彼は私といっしょに福音に奉仕して来ました。」と書いてありました。テモテはパウロにとって非常に大切な存在でした。愛する弟子だったのです。だからパウロはそのことをここにも記してありました。キリスト・イエスの使徒パウロと彼とともにいた愛する弟子のテモテ、そんなふたりから手紙が送られていくのです。これが手紙の差出人でした。

2. 手紙の宛先：コロサイにいる兄弟姉妹 2 a 節

次に、あいさつのうちに見て取ることができる二つ目の要素、手紙の宛先についてです。だれに対してパウロの手紙が送られたのかが、続く2節にはっきりと書かれていました。前半部分に「コロサイにいる聖徒たちで、キリストにある忠実な兄弟たちへ。」と書いています。コロサイにいる兄弟姉妹たちに対してパウロは手紙を書き送ったのです。でも、もしかしたら今の部分を読んで少し戸惑ったかもしれません。一見すると、「コロサイにいる聖徒たち」というのと、「キリストにある忠実な兄弟たち」という二つのことが書いてあるように見えるかもしれません。パウロは別々のグループのことを言っていたのでしょうか？もちろんそうではありませんでした。パウロはここで一つのグループの人たちに対して、その人たちが持っている二つの特徴を挙げていたに過ぎなかったのです。

1) コロサイにいる聖徒たち

まず一つ目に「コロサイにいる聖徒たち」と書いていました。一つ目に登場していたのは「聖徒たち」ということばでした。コロサイにいる兄弟姉妹たちはみんな聖徒だったということです。この「聖徒」ということばは、「聖なる者」とか「分けられた者」という意味があります。クリスチャンというのは、みんな自分のよいわげによってではなくて、ただキリストのみわげによって聖別された者でした。ジェームズ・ボイスという神学者もこのことばについてこんなことを記しています。「聖書的な意味での“聖徒”は、聖くなろうと努力しますが、その聖さがどんなに小さくても、どんなに大きくても、その人を“聖徒”にするわけではありません。聖徒とは、神様によって聖別された者なのです。」と。考えてみてください。絶望的なまでに罪深く完全に墮落している私たちが、自分の功績によって、神様の前に聖く認められるなどということは決してあり得ませんでした。本来であれば、私たちのような罪人が聖く完全な神様の前に立つことは到底できなかつたのです。しかし、私たちの代わりに罪の全くない神の小羊イエス・キリストが、人として来られて完全な人生を歩まれ、十字架にかかって死んでくださ

り、身代わりとなって罪の代価をすべて支払ってくださったからこそ、私たちは今、この方を信じる信仰によって義とされました。Ⅱコリント5：21に「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。」と記されています。これが真のクリスチャンの姿でした。救われたからといって罪を犯さないわけではありません。悲しいことに、私たちは救われた後も神様の前に罪を犯してしまうことがあります。しかし、そんな者でさえ、キリストのみわざのゆえに、神様は聖い者として私たちを扱ってくださると言うのです。だからこそ、私たち救われた者たちを聖書は何度も繰り返し「聖徒」と記していました。あのコリントの教会の人々に対しても、「聖徒」ということばは繰り返し使われているのです。

2) キリストにある忠実な兄弟たち

また二つ目の特徴が「キリストにある忠実な兄弟たち」と続きに出てきました。コロサイの聖徒たちというのは、罪から救われ、聖くされただけではなくて、その後も忠実に歩み続けていた信者だったということです。最初に背景も見ましたが、確かに彼らの周りにはいろいろな問題が起きていました。さまざまな誘惑や葛藤もあふれていたでしょう。神様にのみ従っていくことは大きな犠牲を伴うものだったでしょう。しかし、そんな中であっても、彼らは忠実な信者として歩み続けていたのです。そのことに関してパウロも同じコロサイの中で、次のように称賛していました。来週見る箇所になりますけれども、3-4節に「:3 私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。:4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。」と書かれていました。これが手紙の宛先だったコロサイの教会でした。いろいろな問題は確かにありました。教会の中に、にせ教師たちが入り込んで来て、間違った教えがなされていて、確かにいろいろな不安や恐れを覚えるような状況にあったのです。でも、彼らはそんな中であっても変わらず忠実に歩み続けていました。これが私たちも見習うべき、クリスチャンの姿にもなるのです。より詳しいことはこの後見ていくので、その時も考えますけれども、それがこの手紙の宛先、コロサイの兄弟姉妹たちでした。

3. あいさつの内容：恵みと平安があなたがたにありますように 2b節

そして最後三つ目の要素として見て取れるのは、あいさつの内容についてです。今まで私たちは手紙の差出人と宛先を見ました。最後にあいさつのそもそもの内容を2節の続きに見て取ることができます。「どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように。」と記されていました。それが、パウロが記したあいさつの内容でした。思えば、パウロはよくこのあいさつのことばを自身の手紙の中で用いています。27ある新約聖書のうち、パウロは13の手紙を記しました。その中の幾つでこの「恵みと平安があなたがたの上にありますように」という表現を使ったでしょう？実に13すべての手紙でこのあいさつは登場していました。パウロは、常にこのことを口にしていました。例えばローマ1：7で同じように「ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ。私たちの父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安があなたがたの上にありますように。」と書いていました。それだけではありません。パウロが最後に記したⅡテモテ1：2では「愛する子テモテへ。父なる神および私たちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安がありますように。」と記しているのです。こうしてパウロは同じことを繰り返していました。

なぜ繰り返していたのか、「恵み」と「平安」という二つのことばに注目して考えてみましょう。

▷恵み

恵みとはいったい何でしょう？これこそがすべての始まりでした。信者にとってのすべてでした。私たちが自分の罪と罪過の中に死んでいた時、私たちをそこから救い出してくださったのは、ただ主の恵みでした。私たちが創造主なる神様に逆らって、罪の奴隷として頑なに忌み嫌われることを行っていた時、私たちを義の奴隷として、神の子どもとして生まれ変わらせてくださったのはただ主の恵みでし

た。私たちがどれだけ人の目の前で、よいと思われるようなことを行っていようとも、だれにも決してどうすることもできなかった罪の問題を、私たちの代わりに十字架で贖ってくださったのは、ただ主の恵みでした。本来であれば、神様の正しい御怒りは罪人である私やあなたの上に注がれるべきものでした。しかし、その怒りをキリストが十字架の上でなだめてくださったのです。私たちが受けるべき罪の罰を、この方が背負って、罪に対して燃え上がる神様の御怒りを耐え忍ばれました。そしてこの方が代わりに死んで、3日目にその死からよみがえられたからこそ、その偉大な救いのみわざを通して、神様はご自分のもとに悔い改めて信仰を持ってやって来る者に対して、罪の赦しを与えてくださるのです。イエス・キリストの十字架こそが私たちにはどうすることもできなかった罪の問題を、神様が解決してくださったその愛の現れでした。救いというのは、初めから終わりまで、そのすべてが主の変わらない恵みのわざだったのです。

パウロはエペソ1：7でもはっきりとこう述べていました。「私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。」(新改訳聖書第2版)。でも同時に罪からの救いだけが恵みによって与えられたのでもありませんでした。救われた後、信仰者として歩いていくためのその力さえも、すべてが主の恵みだったのです。この点についてパウロはⅡコリント12：9で「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」と述べていました。こうしてパウロは手紙の初めに、恵みがあなた方の上にありますようにと記しました。パウロはそのことを通して、罪から救い出されたことにおいても、また救われた後の日々の歩みにおいても、初めから終わりまでそのすべてがただ神様の恵みなのだということを人々に思い出させようとしたのです。確かにコロサイの教会は、見てきたように、にせ教師たちの脅威によって苦しめられていました。ほかにもさまざまな問題を抱えていました。個々人もいろいろな問題を抱えていたでしょう。しかし、その中にあつても恵みによって救われて、恵みによって今も生かされているのだという、その変わらない事実を忘れないようにとあいさつして励ましたのです。

そしてこれは私たちも同じことを覚えることができます。私たちが救われたのも、ただ神様の恵みでしかありませんでした。私たちのよい行いでも何でも、主の救いに値するものはありませんでした。私たちが恵みによって救われて、今、信仰者として歩んでいること、みことばを読んで祈ることができるのも、主に信頼して歩いていくことができるのも、神の家族としてともに仕え合っていくこともできるのも、その力はただ主の恵みでした。神様の恵みによって、それが私たちにとってすべてでした。そのことをパウロは最初のあいさつで伝えようとするのです。

▶平安

それだけではありませんでした。パウロは「恵み」とだけ言ったのではなく、「恵みと平安があなたがたの上にありますように」と言うのです。パウロはここで「平安」ということばも用いていました。救われる前、私たちと神様との関係は果たしてどのようなものだったでしょう？そこには間違いなく平安というものはありませんでした。むしろ神様はご自身に逆らって生きている者たちに対して、怒りを燃やされていたのです。私たちは神様の敵として歩んでいました。でもイエス・キリストを通して、恵みによって救われた時、私たちの罪は赦され、私たちは神様と和解することができたのです。この方との間に平和を持つことが可能になったのです。ローマ5：1で「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」とはっきりと記されていました。私たちの行いでも、私たちのよいわざでもなくて、信仰によって義と認められた私たちはイエス・キリストによって、神との平和を持っているのだと書いてありました。神様の敵であった私たちが、神様と平和を持っている、神様と和解することが赦されました。かつては自分たちが忌み嫌って逆らっていた

のに、この世界を造られた創造主なる神様を恵みによって父と呼ぶことが赦されたのです。こんなすばらしい神様の子どもとして歩いていくことが赦されたのです。

そして、そんな神様のうちにある平安は、間違いなくこの世が与えるような平安ではありませんでした。当然、持っている希望が一瞬で消えてしまうようなものではないのです。そのことはイエス様ご自身もはっきりと言われていました。ヨハネ14：27に「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」とあります。もし私たちが恵みによって罪を赦されて、神様との間に平和を持つことが赦されているのであれば、私たちはどんな状況に置かれることがあろうとも、変わらない平安を見出すことができます。なぜかというと、それは救われた私たちに対して、主はもう怒っておられないと確信することができるからです。かつて敵対して歩んでいた時は、死んだ後、私たちには神様の怒り、地獄しかなかったのです。しかし、キリストを信じた今は、神様とともに永遠を過ごすことができるという約束が与えられているのです。私たちは今どこに向かって歩んでいるのかを知っているのです。

確かに今、私たちはさまざまな難しさや試練に直面することもあります。でも、たとえどんなことがあろうとも、私たちは終わりの日に向かって進んでいます。この世の中にあって、平和を持っている主権者なる神様に信頼して歩いていくことができます。私たちと平和を持っている神様がともにいて助けを与えてくださるのです。だとすれば、私たちはどんな状況に置かれようとも、変わらない平安を生み出すことができますと思いませんか？「恵みと平安があなたがたの上にありますように」、それが、パウロが最初にしたあいさつでした。パウロは最初に大切なことを思い出させようとするのです。

もしまだこの中に、神様にあるこの恵みと平安を知らない方がいるのであれば、よく知っておいてください。今、私たちがみことばを通して見たように、もしそれを知らないのであれば、そんなあなたは今なお罪の中に死んでいるということです。永遠の滅びへ向かっているということです。今なお神様の敵として、あなたが歩んでいるのであれば、神様はあなたに対して怒っておられるということです。でもまだそこに救いはあります。だからきょうというこの日に、私やあなたのような罪人のために、ご自分のいのちをささげてください。恵み深い方の恵みを求めてください。自分の罪深さを本当に認めて、罪を悔い改めて主イエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れてください。私たちのよい行いも、どんな力も知恵も自分を救うことなど絶対にできません。だからこそ、キリストの死と復活だけを信じてください。そこにある赦しを求めてください。あり得ないほどの犠牲を払って、十字架の死にまでも従われた救い主を、あなたが心から信じるのであれば、あなたにも救いが与えられると約束して下さっているのです。

また、もうすでにこの恵みと平安を知っておられるという兄弟姉妹の皆さん、もう一度自分自身に問いかけてみましょう。果たしてイエス・キリストはあなたにとって十分な存在でしょうか？イエス・キリストだけがほかの何よりもすぐれた、自分にとってすべてなのだ、この方にのみ心を留めているでしょうか？それとも別のものに心を奪われたり、目をそらしてしまったりしているでしょうか？この新たな一年、最初にも言いましたけれども、コロサイ人への手紙を通して、私たちは私たちの愛するイエス・キリストの姿を学んでいきます。キリストの偉大さを考えるその旅は始まりました。最初に見たように、ルイザ・ステッドやほかの信仰者たちはイエス・キリストに信頼するということ、イエス・キリストのすばらしさを知って歩むということが、いかに最高の喜びなのかを知っていました。イエスを信頼することはなんと絶えない喜びなのだろうと、口だけではなくて、心から言うことができたのです。賛美することができました。皆さん、私たちも同じことを賛美することができます。そのためにも、私たちはこのコロサイを通して愛する主の姿をますます知って、この方に似た者へ変わりたいと祈り求めながら、感謝を持ってともに歩いていきましょう。